

『ロミオとジュリエット』における 恋人同士のコミュニケーションについて： シェイクスピアのテキストに基づくマクミ ラン版とヌレエフ版の比較検討

大阪市立大学 廣田麻子

プロコフィエフのスコアによるラヴロフスキー版を元に振付けられた、マクミラン版（1965）とヌレエフ版（1977）を、シェイクスピアのテキストに照らし合わせながら検討する。特に、テキストの中では溢れんばかりの豊かな言葉とイメージで満たされたロミオとジュリエットの二人のコミュニケーションが、どのように舞踊の言葉に翻案されているか、同じラヴロフスキー版を元に生まれた、いわば兄弟のような二つの版ではあるが、それぞれの振付家の芸術的感性を通して見ると、シェイクスピアのテキストはどのように作品化されるのか、に注目しながら検討する。

まずマクミラン版では、ヴェローナの町を模した活気あふれる場や、舞踏会のフル・スケールの群舞の場の豪華さが目を引く。これは、ラブロフスキー版の豪華さを継承するものではあるが、マクミラン版における町の喧騒や舞踏会の華やぎはすべてロミオとジュリエットの二人のシーンをクローズアップするためのものに他ならない。たとえば、1幕2場92-105行では、ソネット形式をロミオとジュリエットの二人が分け合い、キスに終結する。ロミオが巡礼を装い、ジュリエットが聖者として受けるやり取りは、宗教的な静謐さに満ち、二人を他の者たちとは引き離れた独自の次元へと導いている。マクミラン版における、豪華な舞踏会シーンや町の喧騒は、すべてこの二人の恋人の出会いの宗教的な静謐さをクローズアップするものとなっている。

マクミラン版のもうひとつの特徴は、ジュリエットの跳躍と落下の振幅の激しさである。シェイクスピアのテキストを見ると、一連の鷹狩の比喩に気づく。人目を盗んでジュリエットを訪ねたロミオがジュリエットと別れる際、ジュリエットが"Romeo"と呼びかけるとロミオは"My nyas"と答える。nyas というのは、巢で鳴いているところを捕まえられた鷹の雛である。ジュリエットは、鷹の雛のように父の家に閉じ込められているが、鷹に生まれたからには飛び出す可能性を秘めているのである。鷹狩のアナロジーはロミオにも見られる。ジュリエットは、次のように呼びかける。

Hist! Romeo, hist! O for a falconer's voice

To lure this tassel-gentle back again.

(2.2.158- 9)

tassel-gentle というのは、狩をする雄の鷹である。nyas とは対照的に、コントロールの利いた大人の鷹である。

ジュリエットは、ロミオに成熟した大人であることを求めている。ロミオに一刻も早く会いたいジュリエットは、夜に向かって次のように願う。

Hood my unmann'd blood, bating in my cheeks,

With black mantle, till strange love grow bold,

(3.2.14- 5)

ジュリエットは、自分自身を訓練されていない鷹にたとえている。訓練されていない鷹は、戸外に出るとバタバタするので、目を覆ってコントロールしなければならなかった。はにかみと勇気をもって彼女はためらいながらも大胆に、ロミオの元に羽ばたこうとしているのである。一連の鷹狩の比喩を通して、ジュリエットは、少女の殻を破っていく。運命に導かれてまるで突風に舞うかのごとくジャンプしたかと思うと、意識を取り戻したかのように激しくロミオにキスする、その動きの振幅の激しさを通して、マクミランは一連の鷹狩の比喩でもって表されている、恋する人の経験するあこがれ、ためらい、喜び、苦難、悲哀を伝えるのである。

次に、ヌレエフ版に特徴的なのは、シェイクスピアのテキストには登場しない不気味なスキンヘッドの男たちが最初と最後に登場することである。彼らが、死・すなわち、ニヒリスティックな意味での運命を表象していることは、想像に難くない。それほどまでに、この版では、死が舞台全体を覆っている。シェイクスピアのテキストでは、5幕2場5-12行のジョン神父の台詞で始めてわれわれはペストがヴェローナの街を覆っていることを知るのだが、バレエでは、その事実を不気味な男たちによって全編ににじませようとしているのである。

この事実を念頭において、テキストを読み返してみると、ロミオは、結婚によってジュリエットと結ばれようとするその瞬間にも死を口にすることがわかる。ジュリエットにしても、ロミオの美しさを讃える時にすら、"death"という言葉を使う。さらにロミオは、ジュリエットと一夜を明かした後も、死を口走る。愛する人と一夜を共にした幸せの絶頂は、死と切り離せない。おそらくヌレエフは、こういった隠された死のイメージを巧みにすくい上げ、ニヒリスティックな色濃い豪華な舞台を作り上げたのだと思われる。どうしてモンタギューとキャピュレットの両家はそれほどまでに憎しみ合うのか、どうしてロミオとジュリエットはそれほどまで性急な死を選ぶのか、この作品に横たわるこの永遠の疑問に、ヌレエフはペストと死のイメージでもって答えようとした。死というフレームの中で、愛と憎しみ、情熱と社会規範、夢と目覚め、昼と夜、規則と混乱といった、相反する概念が相克し、そこに、恋人のセクシュアル・エクスタシーが匂いたつのである。ヌレエフ版がわれわれに見せてくれるのは、死を前にして生きること、愛することはどういうことなのか、ということなのである。